

## 鎚木清方の戦争表象

### —— 戦争画集と戦争画報を中心として

五十嵐 小春 (一橋大学)

本研究の目的は、日本画家の鎚木清方(1878-1972)が戦争を題材としてどのような制作活動を行なったか、戦争画集や戦争画報の分析から検証することである。

江戸情緒と明治の文化を融合させた画面で知られる鎚木清方は、小説挿絵から画家の仕事をはじめ、やがて肉筆美人画の大家となった。清方はいくつかの戦争を経験しており、その生涯は戦争とともにあったとすることができる。文芸誌の仕事を手がけていた時期には日露戦争を生き、また美人画の大家となってから迎えた第二次世界大戦では空襲によって自宅を焼失している。日本では日清戦争以後、戦争画というジャンルが本格化し、続いて従軍画家の制度が始まったことで、戦争との関わり方には画家の大きな選択が表れるようになった。清方も、従軍はせずとも戦争に関わる作品を残している。しかし従軍画家として戦争に積極的に関わった画家たちの影ともなり、清方が戦争をどのように捉え表現したかという点はこれまでほとんど論じられてこなかった。

清方が文芸雑誌の口絵で画業をスタートさせてから4年後の明治37年、日露戦争が勃発した。当時最も隆盛を極めた文芸誌『新小説』(春陽堂、1896-1926)において清方は戦争をテーマに描いておらず、日本画家の斎藤松洲(1870-1934)がただ1作、戦争を仄めかすのみである。さらに『新小説』とともに二大巨頭とされた『文芸倶楽部』(博文館、1895-1933)では日露戦争を題材とした作例が清方以外の画家に9点存在したが、雑誌の内容に相応しくないと取り止められたのか、日露戦争2年目になると戦争関連の口絵が全くなることが指摘されている(山田奈々子、2004)。

しかし、清方は日露戦争に画家として関わっていなかったわけではなく、これら文芸誌と出版時期を同じくして戦争画集と戦争画報に参加している。戦争画集の『日露戦争写真帖』(金港堂、1904-1905)には師の水野年方(1866-1908)らとともに12点の掲載があり、清方の作品は直接戦闘場面を描くものではなく銃後を描いたものが多い。戦争画報の『軍事画報』(郁文舎、1904)と『軍国画報』(富山房、1904-1905)にも、少ないながら作品を掲載しており、銃後を描いた作品ばかりである。また日露戦争以降に目を配ると、第一次世界大戦下には『文芸倶楽部』において娯楽の要素が強い《軍国をんな双六》(1915)を掲載し、さらに時代を下って太平洋戦争下には大政翼賛会が主催した「帝国芸術院会員戦艦献納作品展」(1944)へ、戦争画らしさを消し去った美人画《五十鈴川》(1943-1944)を出品している。戦争画を求められたいずれの場においても、清方が銃後の生活を提示していることに注目したい。

以上の検討を中心に、同時代の随筆なども併せて論じ、清方が戦時下に戦争をどのように扱ったか明らかにする。加えて、清方が戦争に対して画家としてどのような立場を表明したかについても指摘したい。